



# 倫理の転換点

## ~番外編~

## 設定

ノンケ警察官(カントボーイ化) × 同期の警察官

18 禁小説です。

変態露出狂のカントボーイ(女性器をもつ男性)を捕まえた警察官八雲圭太が、その変態露出狂の主人である五条剛にカントボーイ化ウィルス被打れて、代わりの奴隷、販売用の商品にされていった『倫理の転換点』本編。

番外編では圭太の父親をメインとしてストーリーを展開しています。本編の10 年ほど前のお話です。

レイプ、裸踊り、蠟燭、イボ付きデイルド、青〇、吊り、羞恥露出、言葉責め、背徳系。

※最初男の体のまま犯されるシーンがあります。後半♡表現多めになります。

17000 字程度で、画像のみ AI で作成しています。

### 登場人物

八雲 大地(やぐも だいち) 35 歳 警察官 警部補

本編で行方不明だった圭太の父。

八雲 圭太(やぐも けいた) 15 歳 高校生

本編では警察官だった。五条と佐藤にはめられ、カントボーイ化させられ、調教されてしまった。

五条 剛(ごじょう つよし) 30 歳 カントボーイ化ウィルス販売人

男を無理やりカントボーイにするウィルスを販売している。

佐藤 学(さとう まなぶ) 35 歳 警察官 警部補

圭太の父大地の同期。本編では圭太の上司になっており、五条に調教された圭太を買い取った。

## 同期

夕方、勤務を終えかけた署内に、ざわついた声が少しだけ残っている。  
大地がロッカーに書類をしまっていると、後ろ扉が古い音を立てながらゆっくりと開いた。

「……大地」

振り返る前から、湿った声で佐藤だとわかった。

「おう。お前も終わりか？」

大地はいつも通りの調子で言う。  
しかし佐藤は返事をせず、大地の真横に立って、ロッカーの扉をゆっくりと開ける。

「……また先輩に媚び売ってるそうじゃないか」

「は？媚び売ってるというか、普通に話しているだけだろ」

「普通にねえ」

佐藤は低く笑った。笑ってはいるが、声には貼りつくような苛立ちが混ざっている。

「何でお前を上司が評価するんだろうな？」

「何でって……ちゃんとやってるからだろ」

「はは……それがムカつくんだよ」

空気がわずかに重くなる。大地は手を止め、佐藤の方へ向き直った。

「お前……また後輩のこと虐めていただろ。聞いたぞ。俺が何度も注意したよな」

「指導だよ。間違っていることを教えてただけだ。立派な警察官になれるようにな」

佐藤の口角は上がっているが、目は笑っていない……。

「指導って言えば何でも許されると思ってないか？」

大地は落ち着いた声で言った。佐藤がロッカーに拳を軽くあて、金属音が鳴る。

「……お前に言われたくねえよ……お前なんか」

言葉の途中で佐藤は黙り、目だけを大地に向ける。

「……お前が邪魔なんだよ、大地」

その本音があまりにもあっさり、あまりにも湿った響きで吐き出され、大地は

眉をひそめた。

「冗談にしては悪趣味だぞ」

「冗談に聞こえるか？」

数秒の沈黙の後、佐藤は一步だけ大地に近づき、肩が触れるほどの距離でささやく。

「お前がいる限り、俺はずっと二番目だ。……鬱陶しいんだよ、お前」

大地はその圧を押し返すように、あくまで冷静に佐藤の手を払いのける。

「くだらねえこと言っていないで、帰れよ。疲れてんだろ」

「……ああ、疲れてるよ……お前がいなくなれば、少しは楽になるのかもな」

不穏な言葉を残したまま、佐藤はロッカールームから出て行った。

扉が閉まる音が響き、大地は気づけば、手に汗をにじませていた……。

## 相談

「大地、ちょっと相談があるんだ……。飲みに行かねえか……」

いつも大地を煙たがっている佐藤にしては珍しく、素直でしおらしい声だった。後輩へのキツイ態度が変わるきっかけになるのなら……。そう思った大地は、ためらいながらも誘いに応じた。

居酒屋では、佐藤は妙に饒舌だった。酒が進むにつれ、愚痴、嫉妬、焦り……。佐藤の内側が溢れ出していく。

大地は耳を傾けながら「こいつを変えるのは難しいのかもしれない」と感じていた……。

そして、2 時間ほど経ち、店を出ると突然、足元がふらついた。

「……あれ……。なんか、目が……」

視界が揺れ、焦点が合わない。呼吸が浅くなり、力が抜けていく。

「大地、大丈夫か？ほら、俺の肩につかまれ」

佐藤の声は妙に明るく、どこか弾んでいた。大地は抗う力もなく、佐藤の腕に支えられ、そのままタクシーへと押し込まれた。

意識が遠のいていく中、耳元で小さく、押し殺した笑い声が聞こえていた。

「……ようやく、俺の時代のはじまりだ……」

次に目を開けたとき、大地は見知らぬ天井を見上げていた。体は鉛のように重く、思うように動かせない。ジャケットもシャツも靴も、いつの間にか脱がされており、ボクサーブリーフ一枚の姿になっていた。

「佐藤……ここは……」

「俺の家だよ」

佐藤は大地に近づくとそのパンツをゆっくりと脱がしていき、存在感のあるその股間を露出させていく。

「な……なにやってるんだお前……」

「何って、これからお前の体で性処理するんだよ。体と顔だけは俺のタイプだからな」

「な……何を言っている……」

「そのまんまの意味だ……」

佐藤は大地の足を持ち上げると、その普段は隠されている尻の中心部にローションをつけた指を挿入していく。

じゅぷっじゅぷっじゅぽおじゅぽおじゅぽおお……♡

「いい音するなあお前のケツマンコ」



その聞きなれない言葉に、大地は眉をひそめた。

「や……やめろ……冗談はよせ……」

「冗談じゃねえよ」

佐藤は指の本数を徐々に増やしていき、その未開発のアナルを自身の好きな形へ変えていく。必死に抵抗していた大地のアナルは佐藤の愛撫に降伏し、その道を広げ、佐藤の指を飲み込んでいく。

ある程度広がると佐藤はそこにペニスの形をしたディルドを挿入し、更に中を押し広げていった。

「ぐううふ……やめろ……おれは……ゲイじゃない……ぐう……うう……ああ……」

「そんなの俺には関係ねえよ」

佐藤はニヤニヤと笑いながら大地を蹂躪していく。そして媚薬の塗られたディルドで責められていた大地はその自身のペニスに血液を満たし、ギンギンに勃起してしまっていた……。

「はははは、カマ掘られてビンビンじゃねえか？お前の警察手帳と一緒に今の姿撮影しといてやるよ」

「なんでお前が俺の手帳を……」

「さて何でだろうな」